

年月日	26	04	15	ページ	10	NO.	
-----	----	----	----	-----	----	-----	--

銅鋳物・マグネ合金製造の戸畑製作所



松本敏治社長

M & A 通じ 事業多角化

銅鋳物や溶接・製品、難燃性マグネシウム合金などを製造する戸畑製作所（本社＝北九州市小倉南区）は、マグネシウムダイカスト事業が間もなく立ち上がる。自動車の軽量化ニーズを捕捉し、新たな柱となる事業を育てていきたいと考えた。松本敏治社長は、主方向の高炉向け純銅製品の事業環境や今後の戦略、新規事業の進展などを聞いた。

「純銅製品の事業環境を。純銅製品は高炉向けが中心。高炉羽口などの銅鋳物では国内シェアが6割程度あるとみています。国内の高炉が減り、需要環境の面では厳しさがあ

る。一方で日系高炉メーカーの海外での企業買収や拠点設立に伴う輸

出の引き合いも始めている。現在は国内向けが圧倒的だが、今後は輸出の引き合いも始めている。現在は国内向けが圧倒的だが、今後は輸出の引き合いも始めている。現在は国内向けが圧倒的だが、今後は輸出の引き合いも始めている。

「海外の日系高炉で羽口などの消耗品を定期的な受注でまわす。ローカル資本の製鉄所も日常的な営業活動が行えるようになるのでは（いか）と考える。駐在は難しいかもしれないが、まずはインドなどで現地エンジニアの契約などを検討する」

「純銅製品は高炉のほか電炉や銅製錬所にも供給している。純銅製品は高炉のほか電炉や銅製錬所にも供給している。純銅製品は高炉のほか電炉や銅製錬所にも供給している。

「難燃性マグネシウム合金の開発。その合金粉末を用いた3Dプリンターによる部材の試作・評価を行っている。航空宇宙や自動車向けに調整を行っている。国内の自動車OEMから試作や一部量産案件を取り込みつつあり、少しずつ売り上げも立ってきているのではないかと考えている」

「高炉から電炉へのシフトで、電炉のカホン電極ホルダーや炉体を冷却するクーラーなどの純銅製品は、国内でもホリウムが増えていると期待する。高炉の羽口も、将来的には本素還元やメタン系エネルギーへのプロセス転換などで構造が複雑化する可能性がある。そうなれば羽口の数量自体が減っても付加価値

を生体材料の分野でマグネ合金を活用できないか、さまざまな模索をしている」

「新たに立ち上げるのが量産部品向けにマグネダイカスト事業。戸畑アイレット工作所、日産エレクトロニクス、エグロバルマテック、ウムコーポレーション、佐藤商事と共同出資の戸畑エグロバルマテックが14～18年に自動車向

部品に使われる。ポイルやパワートレイン系のケーシングでアルミダイカストからの置き換えを目標とする。27年度中の実装を想定している」

「自動車メーカーがマグネダイカスト部品の採用拡大を本格的に検討し始めたのは、日本マグネシウム協会が14～18年に自動車向

自動車向け マグネダイカスト量産

「マグネ製品の採用先はガソリン車とEVのどちらか。両方で話が来ている。内燃機関は燃費を高めるために軽量化したいし、EVもバッテリーが重いため軽量化を図りたい。どこから先に採用されるかは分からない」

「マグネの調達環境はどうか。中国が世界生産の85%強を握り、日本は調達量の95%以上を依存している。中国のデュアルユー

「鉄鋼向け純銅製品の輸出拡大。マグネダイカストの量産のほか、M&Aを通じた事業の多角化と規模の拡大も進める。その3つが今後の経営戦略の軸になる。当社は持ち株会社「戸畑グループ」を設立し、ホールディングス制に移行した。主幹の事業会社が戸畑製作所となる。M&Aで事業会社を増やしていきたい」